
ZeRo

風月 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Zero

【Nコード】

N1499B

【作者名】

風月 紫苑

【あらすじ】

果ての见えない空を飛ぶ鳥は、本当に幸せなのだろうか。あの籠の中で暮らす鳥は、本当に不幸なのだろうか。答えは、誰に問うても返ってはこなかった。最も気高い女から生まれた禁忌の存在。彼は自らの鎖を断ち切る為、『太陽』を取り戻す旅に出た……！

第一章・・・螺旋

果ての見えない空を飛ぶ鳥は、本当に幸せなのだろうか。
あの籠の中で暮らす鳥は、本当に不幸なのだろうか。

答えは、誰に問うても返ってはこなかった……。

足元に転がるそれを、男はまるでボールのように蹴った。
拳ほどの大きさのそれは二、三回転がると、脆く割れた。

「あゝあゝまた割っちゃった。悪いんだけど、その頭蓋骨を片しておいてくれない？」

踏んで割ったら片付けるのが面倒だからさ。ほら、この部屋ってケ
ーブルだらけだからね」

「分かりました。」

淡々とした女の声。男が微笑を漏らす。

床には無数の蛇のように、大小さまざまな太さのコンピューターケーブルが埋め尽くしている。

男は二つのキーボードを叩きながら、同時に5つのモニターに目を通す。ホログラムの画面の数値は目まぐるしく変わるが、彼はそれに動じない。

這いつくばるケーブルは、部屋の中央の水槽へと繋がっている。

薄碧の溶液が満たされている円柱の水槽。その中には小さな心臓がいくつものケーブルに繋がり、ゆっくりと脈打っていた。

小さく嘆息を吐くと、男は手を止めた。

「さて……。僕はここでゆっくりと観察させてもらおう。未来が生まれる日を楽しみにしているよ」

そう呟くと、モニターを閉じた。

* * *

太陽は姿を隠した。理由は誰一人として知らない。

全ての命あるモノを見守る太陽。

人々は太陽に尋ねた。

「どうして姿を隠しているのですか？」

太陽は答えた。

「それは、悲しい事が多すぎるからです」

「でも、貴方がいてくれないと私たちは困ってしまいます」

「では、私と血を同じくする人がこの扉を訪ねてくれたら、私は姿を現しましょう。」

それまでに、悲しい事は消えていると願って……」

そう言って太陽は、人々にわらった。

第二章・・・予兆

しんしんと、鉛色の空から氷の華が舞い降りてくる。誰にも、その存在を明かさないうちに。

「こうして静かに降る雪は――」

命を絶つ一閃が耳に届く。

「何故、今宵に限って紅いのでしょうかね」

憂いに満ちた美女が溜め息を吐くと、黒雲を突き刺すような断末魔の叫びが響いた。

* * *

若さと力強さに溢れた王が、海龍を模した紋章が彫り込まれた剣を掲げ、雄々しく叫ぶ。

「者ども下がれっ！俺が欲するのはアマテラスの首だけだ！」

濃紺の艶を放つ黒髪が、大きく横に閃を引いた勢いで揺れる。

「シユラ王！ご乱心召されたか！ここは貴方様が幼少の頃にお育ちになった城ですぞ！」

馴染みのある老兵の言葉に、シユラの眉が一瞬動く。

「シユラさ——ぐはっ！」

一瞬の躊躇いを見逃さなかった老兵だが、第三者の無情な刀に斬り伏せられた。

鼻につく匂いと斬り口から飛んだ鮮血の雫が、若き王を一瞬の隙から戻した。

傍から、刀が鞘に収められる音がした。

「シユラ様、お怪我はございませんか？」

「イツキ。……ああ、大丈夫だ」

左眼を覆う少し長い前髪を掻き上げ、呼吸を整えて返事をした。

シユラは自らの刀を握る手を見つめる。汗が滲んだこの掌は、何が理由でこうなったのだろうか……。

迷いに、自然と眉間に皺が寄ってくる。すかさずそれをイツキが諫めた。

「シユラ様。今は戦闘中、迷いは禁物です。あなたの命が失われれば、我々は何の為にアマテラスを燦りだしているのか、意味がなくなってしまう」

「そうだな」

シユラは気まずそうに、心配ないと口に出す代わりに微笑んでみせる。その表情が憂いに満ちている事は、シユラに近い立場に居るイツキには分かりきっている事だった。

シユラは血を飛ばして刀を納めると、息を吐く。

時間の感覚が麻痺している。自分はいつからこの剣を振り始めたのだろうか。もう、この庭で一年は戦っている気分だ。

瞳を伏せると、何かを考えるようにややあってから口を開いた。

「イツキ。戦況はどうなっている」

「はい。四天王を中心に善戦しています。ご命令通り、手向かう者のみを相手にしていますので、制圧にそう時間は掛からないかと。ただ、アツタが交戦中に足を負傷したと聞いています」

「そうか。…お前はアマテラスを探してくれ。一刻も早く戦闘を終わらせたい」

「分かりました。剣は、お借りしていても宜しいのですか？」

「構わない。俺はこの刀が振り慣れている。その草薙の剣は、お前の体を守る為に使ってくれ」

「ありがたいお言葉…。それでは、失礼致します」

イツキは瞳を伏せて、淡く笑む。不謹慎な場だと思いつつも、それでも主に特別の信頼を貰っているのは嬉しい。

深々と頭を下げると、腰に草薙の剣を持ち、奥殿へと走っていく。

「何処にいる、アマテラス……！」

いくつもの骸から流れた血で、降り積もる雪は赤く染まる。

鉛色の雪空に、悔しさを噛み締めた声が舞った。

第二章・・・予兆（２）

パチツ！と、囲炉裏にくべられた、乾いた木の皮が弾けた。

その前に座るのは、長い黒髪を持つ凛とした大人の女性。瓜実顔の影が、炎の揺らめきに合わせて揺れる。それは、何とも言えない妖艶な雰囲気醸し出していた。

「私の可愛い兵士達が・・・大勢死んでいくのですね」
憂いに満ちた声が、静寂しか住まない部屋に放たれる。

彼女こそ、この城の主であるアマテラスその人だ。

ここは王族と、彼女付きの侍女しか知る者の居ない部屋。しかし、ここは戦場からそれほど離れていない為、意識をすれば悲鳴や刃の交差する音が聞こえる。

部屋の入り口に控える最年少の侍女は、その凄惨な音どもにガチガチと小さく歯を鳴らしていた。俯き、正座した膝の服を強く握る彼女に気づき、アマテラスは努めて柔らかい声をかけた。

「そのように怯えなくとも良いのですよ。すぐにツクヨが駆けつけてくれますからね」

「は、はい・・・」

アマテラスの声に一瞬安堵するも、彼女はまた俯いて、強く服を握り締める。が、歯が鳴らなくなっただけでも恐怖が僅かに削げた証だろう・・・。

今時分には珍しい囲炉裏の火に、燃えた炭がまた崩れた・・・。

と、慌しい足音が木の板を踏んでこちらにやってくる。

「姉上！入っても宜しいでしょうか！？」

返事が早いのか、障子が開くが早いのか、飛び込むように一組の男女が入ってきた。

豪華な拵えの剣を携えた青年と、呪術的な装飾に身を包んだ金髪の美女。アマテラスの実弟であるツクヨと、その妻ヒレンだ。

二人はアマテラスの前に跪いた。

「メイファ軍に最終防衛ラインを突破されるのも時間の問題でございます。兄上達は既に国外へお逃げになりました。姉上も急ぎ、お逃げ下さい！」

顔を上げ、自分を真っ直ぐに見つめてくる氷碧の瞳。意志の強さを真っ直ぐに感じさせるその目に、アマテラスは淡く微笑んだ。

唐突な笑みに、ツクヨの目がやや丸くなる。

「その真っ直ぐな瞳と面差しは、亡き夫・シュオンに本当に似ていますね。」

ツクヨ。あなたの言葉は大変嬉しく思います。ですが、私はマーファの女王。城を離れるわけには参りません。それに、私はシュラと話がしたいのです。この度の突然の侵攻……。私は、かつて自らが育った城を壊す愚行の真意を知りたいのです」

「ですが、姉上はこの世界の中心であるお方。ここで死んでは民が困ります。それに、私は姉上に死んで頂きたくはないのです……！」

床に付きたてている拳に、徐々に力が籠っていくのが見て取れた。

「姉上、どうか——ヒレン……」

顔を上げ、今にも掴みかかって連れて行こうと勇むツクヨの前を、静止の意を込めた錫杖が立ち塞がった。

凜とした鈴の音が鳴く。

「この戦を治めるには、それこそ神の力以外には出来ません。相手は蛮族相手に腕を磨いているメイファの精鋭。マーファの兵士達は実戦慣れしておらず、一枚岩ではありません。どうぞ、ここはお引き下さい。シユラの狙いはアマテラス様の首。貴方様が既に城を出たと知れば、これ以上の戦闘にはならないでしょう」

御簾の向こうのアマテラスは、表情が全く読めない。その女王を真っ直ぐに、その群青の瞳で睨むように見つめる。

暫くの静寂。

御簾の向こうの人影は、ゆっくりと口を開いた。

「ツクヨ。貴方の熱意に負けました。三人とも。仕度を整えてください」

「分かりました」

三人の侍女が同時に返事をする、支度の為に彼女達は外へ出る。

「ヒレン。あなたも、今までご苦勞様でした・・・。」

アマテラスの口元がふわりと緩んだ。その笑みに気付いたのは、睨むように見据えていたヒレンのみ。

身の丈ほどもある錫杖を収めると、ツクヨの肩を軽く叩いた。

「ちよつと大事な話があるの。来て」

何やら深刻な表情に首を傾げながらも、ツクヨは黙ってついていく。何故呼び出されるのかと、ここで問えるような雰囲気ではなかった。

* * *

アマテラスの部屋から少し離れた袋小路で、ヒレンは小声で話し始めた。

「私、ここに残るから、あなたは真っ直ぐにシンディアに帰って．．．お願い。私はもう．．．長くないし」

困ったような瞳でありながらも、につこりとツクヨに微笑みかける。

「それはどういう意味だ．．．！ちゃんと理由を言ってくれ！ホノカが生まれた時、ホノカの為に絶対一緒に居ようと誓い合った筈だ！」

「．．．そんなの．．．．．そんなの分かってるわ！」

ヒレンの瞳からは大粒の涙が零れていた。

その泣き顔は、兄であるシュオンが病に死んだ以外に見た事がなかった。それほど、普段から涙を見せなかった彼女だけに、ツクヨは驚きに目が丸くなる。

「私だって、ホノカの為に一緒にいたい！でも．．．でも、私はもう死ぬのよ．．．！誰よりも愛してるよ、ツクヨ。」

「理由を話せ！どうして君が——っ！！」

ヒレンはツクヨの胸倉を掴んで背伸びをすると、唇を重ねた。

ツクヨは、突然の事と動揺に体を硬直させた。自分が混乱する事など無いに等しいと言うのに、彼女の言葉にこつも動揺するのだろうか。

ヒレンの細い腕が、ツクヨの背中に回る。

すぐ傍で聞こえる、ほんの僅かなすり泣く彼女の声。泣き声さえ愛しく感じる自分の気持ちに、ツクヨは気付けば、同じように背中に手を回していた。

強く抱き合い、互いの温もりを記憶に刻む。雰囲気、これを今生の別れだと悟らせた。どちらが言い出した事でもない。ただ、口に出した未来は変わる事がないという事実だけが、分かりきってい

た。

「アマテラス様が出発されるわ。あなたも行つて」

「分かった。・・・ヒレン。君が私の妻で良かった・・・」

「私も、あなたが夫で良かった。シンディアとホノカのこと、本当
にお願いね。それから・・・『あの子』の事も・・・」

ヒレンはチョーカーを外してツクヨの手に握らせた。シンディア
王家の紋章が刻まれた、銀のプレートがついたチョーカーだ。

「これは、代々シンディアの正統王位継承者に受け継がれてきた物。
ホノカに渡して。それから、ずっと好きだよって。あと、ごめんね
って」

「ああ」

「あなたに、意志なき天の加護がありますように」

二人は暫し、強く抱き合うと、押し潰れんばかりの想いを堪えて別
れた。

第二章・・・予兆（3）

いくらか積み上げられた屍。

血の匂いも、辺りには嗅覚を麻痺させるほど充満していた。

点々と鮮やかな赤が散った雪景色の中を、シユラはアマテラスの姿を探しに自らも殿内を探索していた。

大將が陣の奥で座っているだけというのは性に合わない。普段から先陣を切って戦い、名前通りの戦神ぶりを発揮しているのだから後の撤収や四天王同士の連絡などは全て老師に任せ、勝手知った宮殿内を走る。勿論、君主としてすれ違う兵士達への労いは忘れない。

（これだけ探してもいないとなると、姉上にはやはり逃げられたか。）

そうこう考えながらも、足は自然とある場所に向かっていった。

通称・太陽の塔。そこは、アマテラスとごく一部の者しか入る事が許されない施設。自分がこの宮殿内で育った時ですら、片手で数える程しか足を踏み入れたことは無い。

それでも、何故かシユラの頭に躊躇いはなかった。アマテラスがいつなら、もうこの塔以外には考えられなかった。

堂々と聳え立つ塔の中を駆け上がり、最上階に辿りついた。

分厚い合金が壁を作っている中、最上階への扉を開けた瞬間、世界はがらりと変わる。

そこは、女王の私室の品格が漂っている。壁や床には暖かみのある木材が使われ、本来は冷たい窓を、趣のある障子や簾が隠していた。

しかし、廊下を照らす明かりは心細く、ひっそりと灯る蠟燭や行灯のみ。太陽の女王である彼女へと続く道がこう薄暗いのは、少し滑稽な話である。

シユラは一つ息を吐いた。最奥に控える障子。その向こうが、アマテラスの部屋だ。

刀を抜いて中に入る。

と、シユラはそこに待ち受けていた人物に我が目を疑った。

第二章・・・予兆（４）

自分に槍を向けているのは、兄・ツクヨの妻であり、幼馴染みにも等しい時間を過ごしてきたシンディアの王妃・ヒレンだった。

「アマテラスは何処だ」

「知っていても教えられないわ」

普段は柔らかく祝詞を唱える声だが、今は憎悪を含んだ凜々しい声音だ。

「シュラ。お願いだから、今すぐマーファから手を引いて。私は『現在』を壊したくない！あなたも自覚してるでしょう！？あなたの望みの為に、事実を知らない人達が傷ついて良いはず無いわ！」

「それは、お前が運命を握られた事が無いから吐ける台詞だ。」

氷のような殺気を含んだ言葉に気圧されて、思わず黙る。明らかに意志を持って放たれた彼の言葉の強さは、長い間離れていても分かる程だ。

ヒレンは瞳を伏せる。

これは迷いだろうか。否、躊躇いだ。

「それでも私は、あなたを刺し違えてでも止める！」

ヒレンは鋭い突きを繰り出す。シュラは体を捻って、紙一重でかわした。

刹那、大きく踏み込んだシュラの一閃が来る。素早い剣の動きを槍の柄で受け流す。すぐに振り下ろしが来るが、それも上手く捌いた。

ヒレンは気合を発する声を出すと、素早い突きをいくつも繰り出す。が、それは全て躲かれて掠りもしない。

見せ付けられる実力の差。ヒレンは強く奥歯を噛み締めた。

今まで一度も勝てた試しは無い。けれど命と引き換えにせめて、想いを引き戻す為の一撃だけでも。

「はあっ!!」

ヒレンの大きく踏み込んだ止めの一撃。

かわそうとして不用意に力んだ足を、艶のある床板がさらった。

「しまっ——!!」

———— ドオオオオオオンッ!!!!!!!!!!

突然の雷鳴のような轟音。

視界を奪う眩い閃光。

一瞬で巻き上がる粉塵。

二人は自分の武器を放り出し、耳を塞いでその場に蹲った。

ややあつて静寂が訪れると、シユラは耳から手を離れた。

凄まじい空気の衝撃に、未だに耳鳴りがしているようだ。

辺りには濛々と煙が立ち込める中、一歩足を踏み出したシユラは、自分の足元にぞっとした。

目の前にあるのは、何層にもなる階を貫いて出来た巨大な穴。

下を覗いて土煙の向こうに目を凝らしてみても、底は見えない。

息を呑む光景に、シユラは眉をしかめた。先程の轟音に覚えがある。記憶の中に焼きついた光景を思い出し、シユラから自然と舌打ちがもれた。

と、空耳のように自分の名前を呼ぶ声がする。シユラは慌てて辺りを見渡す。

「・・・シユ、ラ・・・・・・・・」

「ヒレンッ!!」

土煙の霞みの向こうに見慣れた金髪を見つけて、シユラは慌てて駆

け寄った。

そこには、穴の縁に腕一本でぶら下がる彼女がいた。体には無数の木片が突き刺さり、白の服を紅の斑点に染めている。とても自力で這い上がれそうには無かった。

「・・・シユラ・・・」

話があるのか、助けを求めているのか分からないか細い声音。

シユラは今にも離れそうな彼女の服を掴んだ。自分の手は、肩に負った傷から流れる血で、手を掴めば滑ると思ったのだ。

「自分で上がって来い！兄上とホノ力が待っているぞ」

必死の形相のシユラに、ヒレンは困った笑みを浮かべた。頬を一筋の涙が流れる。

「だから、やっぱりダメなのよね。命を取るって言った相手を、躊躇いもなく助けるくらい優しいから・・・」

痛む腕を振り上げて、ヒレンは自分の腕を掴んでいるシユラの手を握った。安堵に、硬かったシユラの表情がやや緩む。それにヒレンも微笑み返した。

「ヒレン。そうだ。上がって——」

「ごめんね」

嫌な予感がざわりと胸中に広がり、シユラは掴む手を硬くした。

「これが、私に与えられた運命・・・。。最期に、あなたと少しでも話が出来てよかった」

「ヒレン、何を考えている」

ヒレンの意識の奥で、警告音が鳴っている。これにシユラを巻き込んではいならない。彼はまだ、『あの子』の為に生きるべき人間なのだから。

「本当のシユラは何も変わっていなかった。・・・もう・・・良いの」

その言葉は諦めだろうか。それとも、彼女の内では何かが達成された

満足感だろうか。

言葉が出るよりも早く、ヒレンはシュラの掴む部分の服を裂き、自ら腕を外した。

「ヒレエエエエーンッ！！！！」

捕まえ損ねた手が宙を握る。

数粒の涙を零して、彼女の体が暗い階下へ落ちていく。

シュラが慌てて飛び出そうとした瞬間、あの雷のような轟音が再び鳴った。目の前を稲光のような真っ白な閃光が、まさに光の速さで過ぎる。

あの先にはヒレンがいる。様々に入り混じった感情の波が起こる。一番最初に襲ってきたのは絶望だった。

目の前に迫ってくる光に、ヒレンは目を閉じた。

今度こそ諦めだった。どう足掻いても、光の速さに宙で動きの取れない彼女が叶う筈が無い。

「シュラ、ツクヨ。『あの子』達をお願いね……………」

その言葉は母として・・・そして、未来を垣間見る力を持った占術師としての言葉でもあった。

大地に、二度目の轟音が轟いた。

第二章・・・予兆（5）

誰の耳にも聞こえただろうその轟音に、イツキが振り返る。

「・・・先程も聞こえたこの音……。シユラ様の御身に何か・・・」

思考を遮るように、馬の嘶きが聞こえた。

イツキの思考が引き戻される。今の使命は、目の前にいるアマテラス一行の逃げ場所を探る事だ。

背中から鳥の翼を出し、木の幹に姿を隠して様子をそろりと窺った。

が、目の前の光景にイツキは絶句する。

「いったい、さっきの一瞬で何があった・・・。」

そこにあつたのは、アマテラスの侍女三人の惨たらしい死体。そして、その中心には一人の女性と禁忌の姿を持つ幼い少年。

ほんの数瞬。まさに何度か瞬きをしている間に、彼女達は悲鳴もあげずに命を散らしたのだ。

イツキはシユラから借りている剣を抜いて詰め寄った。

「貴様がアマテラスか」

しかし女は答えない。

まだ十歳にもなっていないだろう幼子は、女の服を軽く引つ張った。と、彼女は本当に穏やかな笑みを浮かべて、見上げてくる子供に振り返る。

「・・・お前はアマテラスじゃないのか？」

「はい。私はアマテラス様ではありません。ですが、私はアマテラス様に従う者です」

につこりと微笑んで、今度はイツキを振り返る。

途端、下腹部に例えようの無い衝撃が走る。

それは、一瞬の油断。捜し求めるアマテラスの名前に気を取られた、戦場での初めての油断だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・しま・・・・・・・・った・・・・・・・・」

体の奥からせり上がってくる液体を堪らず吐き出す。

新雪が鮮やかな紅色に染まり、それはまるで血の華のよう。

震える体でゆっくりと視線を下腹部に向けると、幼子の鋭い手刀が自分の背中まで貫いていた。

汚れていない手と、こんな子供が・・・・と油断していた自分が、無性に腹立たしい。自分に対する落ち度に、傷の痛みよりも怒りが勝る。

「・・・・・・・・さようなら・・・・・・・・」

冷徹な言葉。

一瞬、視線の重なった子供の目にイツキは寒気を覚えた。

生気の無い、虚ろな瞳。だがそれは誰かに操られている瞳ではない。凍るように鋭いわけでも、憎しみが焼くように熱いわけでもない。

これは、興味の無い瞳だ。例えば相手が誰であろうと、興味がないのだ。

「ぐあああああつっ！！！！」

手が抜かれると、腹から凄まじい勢いで血が噴き出す。

体の末端から血液がなくなっていく感覚。失われていく生者の証から、立つ力までも奪われていく。確実に近づいてくる死神の足音。少年は自分に掛かった返り血には微塵も興味を示さず、ただイツキの手にしっかりと握られている物のみに興味を示していた。

「草薙の剣」

「これは……っ……命が尽きても、渡せん……っ！」
あらん限りの力で睨みつけてみるが、相手にそれは何の影響も与えない。

少年は血でやや溶けた雪にしゃがみこみ、イツキの手を取る。

「放せ」

「これは、主からの借り物だ……。絶対に渡さ——」

「放せ」

「うああっ!!」

鈍い音がして、辺りにイツキの悲鳴が上がる。

今まで柄を握っていた筈の親指が、人体の構造ではありえない方向を向いて離れている。

「放せ」

「ああっ!!」

一呼吸を置いて次は人差し指。五本の指が柄から離れたのはすぐだった。

少年は剣を手に、ご丁寧に鞘に戻して女に渡す。と、女はまたも、極上の柔らかい笑みを向けるのだ。その笑みに、僅かに少年の表情が歳相応に溶けるのが分かる。

イツキは無事なもう片方の手で指を直そうとするが、血が抜けて力の入らない彼には到底無理な事だった。

諦めが頭を過ぎった時、胸は申し訳なさに押し潰されそうだ。涙が自然と零れる。

そんな力があるなら、この体にもう一度立ち上がり、主の剣を奪い返すだけの力をと願うが、叶えられる筈も無い。

女は侮蔑を含んだ笑みでイツキを見つめる。

「アマテラス様に仇なす愚か者は、こんな最期がお似合いです。じきに雪が本格的に降り始めます。あなたの体は、この美しい雪の中で醜く朽ち果てるのです。」

「・・・貴様・・・っ！」

体に力を込めようと意識する度に、体から確実に失せていく血液の流れる音が聞こえてきそうだった。

次第に遠くなる馬の足音。視界も段々と霞み、歪んできた。もう、この体には指一本動かせる力が無い。

そう悟った時、イツキは静かに目を閉じた。

「申し訳、ありません・・・。。シユラ・・・さ、ま・・・。」

口に溜まった血糊に上手く言葉が出なくなると、イツキの瞳を血の涙が一筋零れた。

腹から噴き出した血と背中から散った羽根は、雪に紅色の華を描く。そこで眠るイツキは、まるで華に抱かれるようだった・・・。。

そして、時は流れる・・・。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1499b/>

ZeRo

2010年10月9日16時04分発行